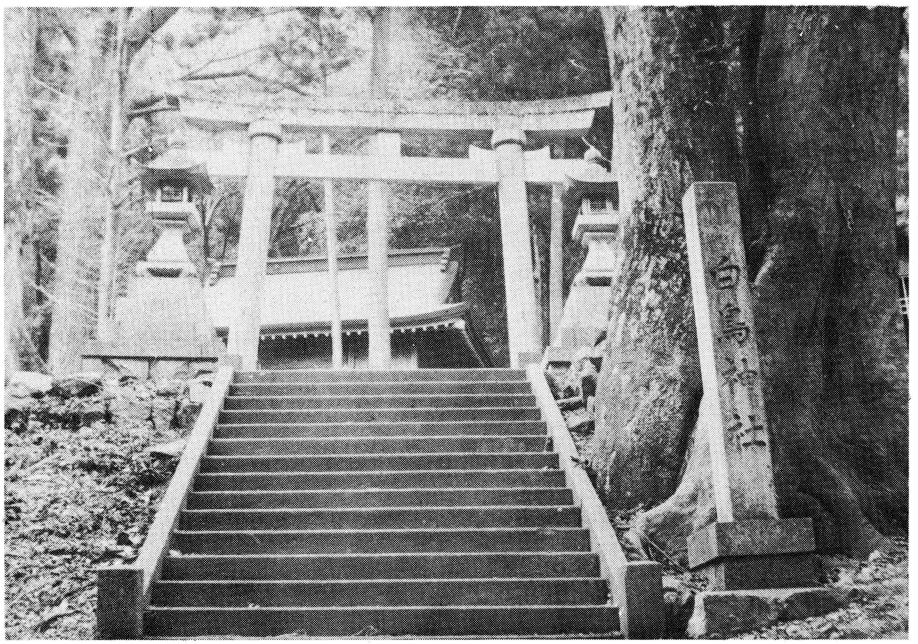
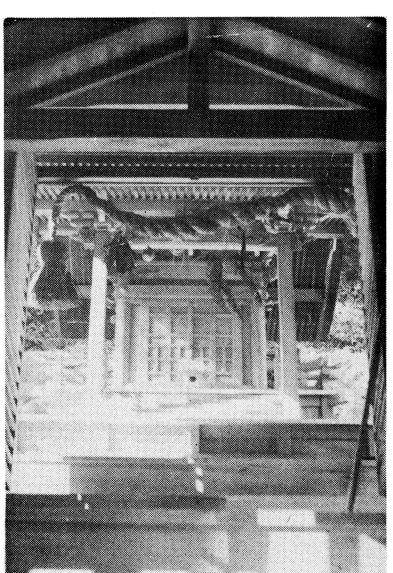
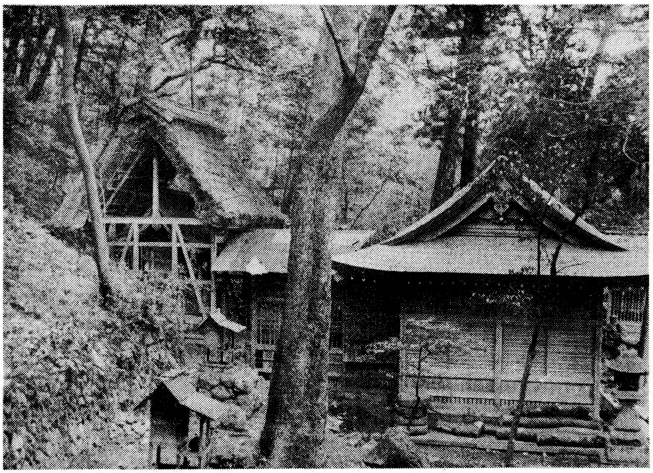
白鳥神社史



鳥居からの拝殿

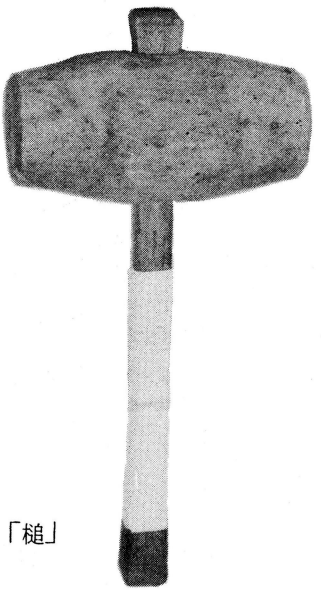


本殿前の正月の〆縄とおかざり

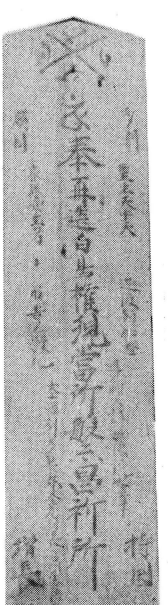


改築前の本社のおさや

改築された本社



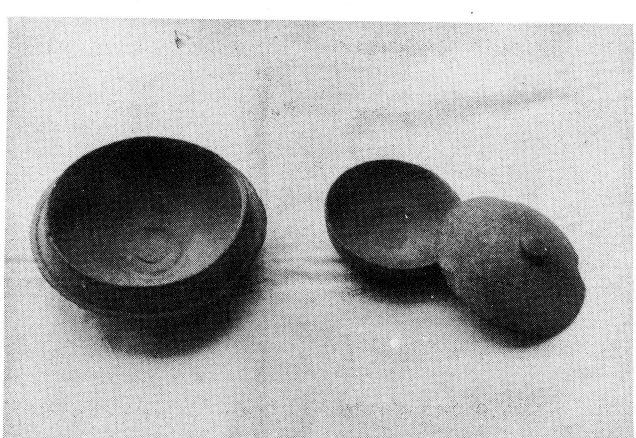
御改築の際の「槌」



御改築の際の棟札

かど松のホオカップ

上方古墳から発掘された「須恵器」
約1,300年前のもの



序

日本武尊を祀る我が白鳥神社はその創建は不詳であるが、美濃国神明帳に従四位白鳥神社と明記されている所から、少くとも千年以上の昔からお祀りしていることは明かである。現在本郡内の神社は凡そ三百社もあるが、この神明帳には僅かに十八社だけしかのつていない。このように古い神社で氏子従来の行事からみても代々この神を崇敬してきたことは明かである。この度御本殿が改築されその御遷宮を機にこの由緒ある神社について将来のため社史を編纂して記録を残したいものとの議が起り、主論者である大橋敬二、大橋鶴二、高木佳又の三氏が発起となり、編纂委員としてこの三氏の外に田中安次郎、田中勉、田中秀夫、高木三郎、大橋進、高木正義の諸氏を加え、其後大垣市の林周教先生、神職の大橋直広先生に色々史料の提供や鑑定をお願いして編纂を始めたが遺憾ながら大橋敬二氏は中途で死亡され、田中安次郎

氏は病気で辞退されて、七人の委員で仕事を進めてきて不充分ながら茲に「白鳥神社史」を集録し、氏子各位に配布することにしたが、私共の鎮守の神が如何に古く尊いかをよく諒解され益々この神を崇敬せられることを念願して本史の序とする。

昭和卅五年十月一日

委員代表
区長　高木佳又

一、当社の由来

昔日本武尊が大和の都を御出発になつて、東国の賊を平らげ給い、御帰途伊吹山の悪者をも平定されて、伊吹から不破郡玉村、松尾村、そして美濃の中道（牧田街道）にかゝり給い、次に沢田村を経て此多芸郡上方村をお通りになつたことは古事記にもみえている。

到多芸堅上之時。詔者。吾心恒念白虚翔行然今吾足不得歩。
成多芸斯形故号其地謂多芸地

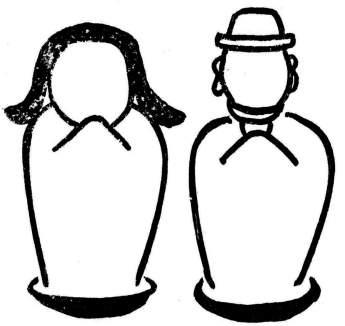
こゝに多芸野の上とあるのは、この上方村は地理的に考えても、多芸野の上にあたるところから、上方の称が起きたものと思う。思うに命は強勇の御性質であつたので、病をおしてこの地までお出でになつたが、尚も御病はつのり、加えて御足も叶わなくなり給うた。往古この地方は多芸山の麓のため飲水の乏しい地で、たまたまこの地に清泉が湧出ていたので御脳深き尊は水を

求めにこの地においでになり、其清泉をお飲みになつたところから、後世私共の祖先が尊の御徳を偲び祭神として崇敬してきたものと思う。社名も最初は「白鳥明神」といつたように文献にでている。日本書記をみると「明神」の二字を「アラカガミ」と訓じておる。おそらく「カミ」といゝ「カガミ」と言うも神聖な御神徳を讃美し奉る辞で、この社名からしても又私共の白鳥神社の歴史の古きを物語つてくれます。それが江戸時代に入つて白鳥権現と称し、次いで明治六年に今日の白鳥神社ととなえるようになつた。

二、祭神について

御神体は最初のものは散失してないが、現在のは室町時代（約六百年前）に再製しあげた御神像である。その御神体は男女両神の御座像の木像である。男神は倭建命で高さ八寸位で御衣冠の半像で、女神は倭比売神で高さ七寸位で御垂髪の半像で、両体共お顔等が朽損している。

三、棟札について



始めは文字がきざんであつたが
今は一字もよむことが出来ない。

元禄十四年（約二五〇年前）五月と、延享五年（約二〇〇年前）三月には本殿の造営があり遷宮式を行つたようである。延享五年三月一日の遷宮導師は大**墳**村妙徳院亮海法師とあります。

四、当社にまつわる神事

一・お宿替え及神移しの儀

当社の宮当番は毎年十一月十八日に神職奉仕の上、お宿替えの祝詞をあげ、玉ころおみくじに依り来年の当番をきめ、一切の社用を其人に委任することになつている。其選に当つた者は無上の光栄と喜び、夕刻身を清め御神燈をあげ、神酒を供え、新神宿の奉告をする。

次いで十一月廿九日夜丑三の刻を期して、前神宿から神移しの儀を行う。神宿のみしるしとして〝わにぐち〟をおうつし申す。

註〝わにぐち〟（林氏の鑑定によると約三〇〇年前江州でできたもの）

昔は神前に飾り、これをならして参拝した。いつか盗人がこれを盗み出し、牛谷附近までいくと体の自由を失い、一歩も歩くことが出来なくな

つたとか。よつて盗人は懺悔して其の非を神に謝し、お許しを乞い始めて身の自由を得たとか。其後〃わにぐち〃のあらたかさを今更のようにいたく感じた村人は御神体のおしるしとした所以である。

この神移しの儀は前記のように部落民の寝静まる頃を見計らい、新旧神宿に依り先づ諸道具をお移しする。これが終ると新神宿は紋服に身を正し、サン俵、白布、マスクを準備し旧神宿に参り、神酒その他を戴き、お移しに関する一切の打合わせをすます。愈々その時刻（前記）がくると、新神宿は白布を首からかけ、サン俵（米の皮俵を小さくしたもので、その右肩にゴヘイをかざる）の上に旧神宿から御神体をうく。その時の感想をこの神宿にあたつた誰もが同様に語るには「米一俵位を胸に抱くの思いで、この重さでどうして家まで奉持出来るかを案じる」と。誰もが如何に身心緊張するかがよくうかゞわれる。こうして旧神宿の先導で新神宿に到り、床の間に安置し奉る。この間両者共一切無言で行うことになつている。終つて旧神宿に神酒をふるまい無事に儀の終つたことを喜びあう。今に至るもこの厳粛な儀式はそのまゝに残つている。因みに大正年間以来神宿として

奉仕した人を記す。

（以前は不明）

大正十年　田中重太郎
大正十三年　田中重太郎
昭和二年　高木喜一郎
昭和五年　田中　清一
昭和八年　大橋　健一
昭和十一年　大橋　林作
昭和十四年　田中　惣吉
昭和十七年　田中　光男
昭和二十年　田中宇三郎
昭和廿三年　大橋　敬二
昭和廿六年　田中　源市
昭和廿九年　田中徳次郎
昭和廿二年　大橋　正録

大正十一年　大橋　林作
大正十四年　田中覚太郎
昭和三年　田中時次郎
昭和六年　高木　逸平
昭和九年　大橋　金一
昭和十二年　田中儀太郎
昭和十五年　田中　治市
昭和十八年　田中大次郎
昭和廿一年　大橋小十郎
昭和廿四年　大橋　健吉
昭和廿七年　高木　修一
昭和三十年　田中宇三郎
昭和卅三年　高木　三郎

大正十二年　田中　治市
大正十五年　田中　鶴吉
昭和四年　田中　平治
昭和七年　田中　鶴吉
昭和十年　田中安次郎
昭和十三年　大橋　鶴吉
昭和十六年　高木　逸平
昭和十九年　大橋　敬二
昭和廿二年　高木常次郎
昭和廿五年　田中久次郎
昭和廿八年　高木　三郎
昭和卅一年　高木常次郎
昭和卅四年　高木　正義

2・お神酒びろめ

毎年十二月一日に新神宿は、旧神宿、宮係、親類縁者を招いて一ケ年神にお仕えする身になつた喜びを一同に披露するため酒宴をはる習わしになつている。その宴終つて一同は正月の神前のお飾りの〆縄をなう。本社用として（長さ九尺、中央部の直径約一尺）一本、摂社用（長さ三尺ー六尺のもの）四本、計五本作り正月まで当家の床の間に安置する。

3・神宿の諸奉仕

神宿はお宿替えの十一月から翌年の十一月迄一ケ年間獣肉は一切たつて、一切の身の穢をさけ、ひたすらに神にお供え申すが、特に左記のようなかわつた行事が今尚残つている。

㋑　ス、払い及び正月の〆縄飾り、門松立て

神宿は大晦日が近づくと身を清めて社殿内の清掃をして後、鏡もち及〆縄を飾りつける。

その飾りつけは右から順次

炭、たつくり、俵藻、うら白、えび、緒、だいだい、ゆづり葉の八色

である。そのいわれを古人からきくに、「すみやかに田作り、俵もとつて、裏に白い庫をたて、えびのように腰のまがる迄働き、親代々ゆずる」とか。

門松は昔から五楷又は三楷の松を本社に三対、摂社に各二対、計十一対を立て、向つて右に男松と男竹、左に女松と女竹を立て、三方に控杭をそえる。その上にお供物をのせるため藁で作つたホーカツプ二個つゝをつけた。然し昭和廿九年から山林愛護の国策にそつて本社前に二対だけ立てることになつた。

㊐ 正月の神事

神宿は大晦日の午後になると冷水を浴びて身を清め、座敷に籠つて無言の行に入る。こうして正月三日の昼迄丸三日間家族や村人に対しても一切無言で、ひたすら神への奉仕にあたる。正月三日間の神前へのお供物は、朝夕はお餅二切れ、ボラ肉二切、お昼はごはんとボラ肉二切れを夫々門松のホーカツプにお供えし、後改めてお払いに参上する。勿論元旦の朝は氏子の誰よりも早く参拝してお供えをする。この三日間は紋付

袴でおつかえする。

㈠ 左　義　長

毎年一月十四日門松、〆飾り等を境内の中央で焼き、子供も大人も大勢集つて、今年も病災をのがれるようにと餅を焼いて食べる。

㈡ 農作物豊凶のお札

一月十五日朝神宿宅で通称お粥札を行つてその年の豊凶を占い村人にしらせる。

㈢ 神宿の別火

神への奉仕一年間のうちに親戚縁者や部落内に出産とか葬式等のある場合は三日間「別火」といつて食事も自分だけは他の者と別の火で煮たものをとり、その他煙草の火なども一切別にする。

4・おさや葺き

毎年十月十四日に本殿及拝殿のおさやをふきかえる行事である。奉仕の村人は二、三日前から身を清浄にし、当日の服装も洗い清めたものを用いる。大正十六年の拝殿改造迄は本殿と拝殿と一年毎に行つてきたが、

以後は本殿だけを毎年葺替えてきた。然し今回の御本殿改築によりこの長年続けてきた行事も自然なくなつた。

5・戦勝祈願祭

武神日本武尊を祭神とする当社は古くから戦争の神として近郷に知られ、戦争の度毎に氏子はもとより、各方面から日本の戦勝と肉身の出征者の武運長久とを祈念してお参りする人が多く、特に大東亜戦争に於ては、これらお参りする人が夫々に武運長久祈願の幟を境内に立て、その数が二百本にも及んだ。氏子としては毎月厳粛な祈願祭を行つてきた。

6・雨乞い祈願

此上方村辺の地は多芸山の麓であるのに昔から飲水の乏しかつた地で特に夏作の用水についてはそれこそまこと死活問題であるだけにひでり年になつて頼みの番水も少くなると村中の者が神社の境内に集まつて必死に雨を乞うた。いよいよその深刻さを増すと神職に御祈禱を願い、村中の男が大幟をおしたて、上方山の頂上に祀る弁天さんまで登り祈願をこめたという。後年この山登りをやめて村中で日中に宮ごもりをするよ

うになつた。こうして村人の真心が神に通じ十分の雨をいたゞくとそのお礼に宮山に何百という燈籠を大の字形につけ、老いも若きも揃いの編笠姿で踊りあかしたという。この日ばかりは近郷から見物人がわんさとおしかけ踊りの中心の境内には奉納の酒びんが何十本と並んだともいう。この雨乞い踊りこそ上方の文化財であろう。村の中年以下の若い人達のために雨乞いうたを村の時次郎氏にきく。

○東西南北おしづまり　このまゝしづまり下されよ

昭和　年　月　この方照りつゞき

田畑立毛も枯れすほみ　　みるにみかねてなげかされ

そこで氏子のなげきさに　　氏神様に伺えば

三日三夜のそのうちに　　ごりしよの雨を下さると

こゝでごりしよがあるなれば　　万民よろこび　かぎりなし

こゝでごりしよがあるなれば　　お礼は大の字とぼします

なげきを甲せばほどながの　　これでしばらくきりまする

○あやうた

あやもりそらう　　にしきもろよ
白鳥さまの　　とちよともろよ
いつまであやを　おいそろよりも
早くして帰えろう　　あめがふる

五、摂社について

本社の両側に図のように四摂社をお祀りしている。

弁天神社
御鍬神社
本社
秋葉神社
神明神社

○弁天神社　昭和十一年八月二十九日に滋賀県竹生島宝厳寺から弁才元の御分身として、廚子入御木像をお祀り申す。雨乞いの神である。

○御鍬神社　農事の神で、隔年外宮豊受神社からお札をおうけしてお納めしている。

○秋葉神社　火防（ひぶせ）の神様で、毎年静岡の秋葉神社からお札をおうけしてお納め申す。

○神明神社　御社はもと松ノ木原二二一番地に祀るも昭

和六年に現在地におうつし申し、更に昭和卅四年十二月白鳥神社々殿の改築なり、旧本社殿を当社殿として御遷宮申しあげた。尚昨年来の御遷宮の際、多くの棟札が出ましたので、これによつて当社殿の御改造の年なり回数が凡そ想像が出来る。

左に判読出来るものだけ記して当社の古きを伝えよう。

一、寛延四辛末年

一、文化二乙凶年八月二十二日

一、明治十九年十月七日（本殿一棟）

一、明治二十四年九月一日（正殿一宇）

一、昭和二十三年十二月二十四日

隔年内宮より御札をおうけしてお納め申す。

六、郷土の由来

私共郷土の由来を正史（濃飛両国通史）の上から考えてみよう。美濃国神明帳に「当郡従四位上白鳥明神あり。これ住民の祖神なり。」とある。又他

の文献に美濃国多芸郡建部郷とありますが、建部とは日本武尊の御名をとつた称で、御子稲依別王の御**裔**を建部の君と称し、その私有の部民が大化以後（約一三〇〇年前）公民として一郷をなすに至つた。従つて建部郷は即ち今の養老村のことでありましよう。こうしてみると、私共の祖先も又古い昔からこの地に住んでいたことは、これらの文献に明らかでありますが、これを立証するものに、上方古**墳**から（今のぬくとばの畑の中）大橋鶴二氏が堀出された土器がある。この土器は昔の祭器の一種で、僅かに破損しているのみで、原形をそのまゝ見ることが出来る。この土器は須恵器というもので、恐らくまだこの近くに埋没されているか、破片となつて田畑に散逸されているものが今後もみつかるものと思う。この土器は古**墳**末期のもので、今から一二〇〇年から一三〇〇年頃前の古**墳**に用いられた遺物である。当時は文字とてはなく、たゞ遺物がものを言うことを思うと、私共郷土の最も大切な文化遺物である。その頃相当の土着人がいて田畑を開墾し技術は幼稚ながらも自らの含料をつくり生活していたものと想像される。古**墳**はこれ等の住民を支配した当時の豪族の墓である。以上のように文献からも古**墳**の発掘物からも私共の郷土は

他部落より古い昔から開けていたことが明らかでこれは確に大きな郷土の誇りといわねばならん。

タイプオフセットと綜合印刷
水谷印刷
大垣市郭町4丁目・TEL.3256